

大学の文化資源へのゲートとしての大学図書館

福島幸宏

本論では、大学図書館が、大学が所蔵している文化資源のゲートとなりえるポテンシャルを持っていること。さらにそのことによって、国公立・私立を問わず、大学という存在が公共的な組織として社会にアラインする上でキーとなる機構となること、それは同時に大学図書館が大学組織にとって欠かせぬ機構となりうることを端的に論じる¹⁾。

現在、大学への期待や社会的役割が急速に変化している状況は、本特集の他の論考でも述べられていることなので詳述しない。ここでは、そのなかで浮上してきた「社会に対して開かれた存在であるということが望まれる²⁾」という視点を延長して述べることになる。

まず、想像していただきたい。大学の各所、教員の研究室や倉庫の奥、図書館の隅の段ボール箱に、大学がそのリソースを投入して収集し生産してきた、実験成果や標本、古文書や出土遺物が放置されている状況を。これは大学の新旧や大小を問わず発生する現象であることは、その構成員全員が承知している。近年、大学のアピールも兼ねて大学博物館が設置されて精力的に資料を集め出しているところもあるが、まだまだその動きは限定的である。これら文化資源は大学の研究・教育の成果であり、その大学が、特別な個性的な存在であることを社会に認めさせる一つの回路でもある。この文化資源を社会と共有する場面で、大学

図書館のアドバンテージは最大限に発揮される。

その強みとはなにか。最大のものは、職員「資料情報はwebに公開され、実物も閲覧・利用させなければならない」というマインドと、それを実現する環境が整っていることである。図書館の世界では当然の原則である所蔵資料を広く明らかにする、ということが、学芸員や教員には案外に共有されていない場合がある。未だに「知っている人だけ知っていればよい」、もしくは「こちらが収蔵資料から選んで知らせる」という、所在情報を出す段階でコントロールする姿勢が払拭されていない³⁾。この点で、図書館の機能やその職員のマインドは異なる。また環境としては、資料の形態を問わずある程度自由に使うことのできるリポジトリが最大の装置となろう。実際に、北海道大学などではリポジトリに実験成果紹介の動画を掲載している⁴⁾。これはあまりメタデータにとらわれずに情報を公開できる仕組みがすでに獲得されていることを示す。マインドと装置、という公開への武器はすでに入手されているのである⁵⁾。

一方、アーカイブ資料や博物資料の評価や収集についてはまだ難しい側面もあるだろう。その点こそが、教員や博物館職員との連携が具体的に行われる場面である。つまり、大学で生産・収集される学術・文化情報の総体を文化資源としてとらえ、その入口は主に教員や博物館職員が担当し、出口を図書館職員が担当する、という連携である。

将来的には博物館・図書館とも担当できる、入口も出口もコントロールできる、というのが大学の情報専門職のモデルになるべきだろうと考えるが、それまでは役割分担と連携によっていくのが妥当だろう⁶⁾。

最後に、文化資源共有化の最低限の要素を述べておきたい。まずは、資源の存在を広く知らせることである。要するにメタデータの作成と公開ということになるが、ここで留意したいのはデータベースは当初はまったく作り込む必要はない、ということである。DC-NDL⁷⁾の要素を満たしていれば十分に利用できる。そして当然ながらその項目にはすべて記述する必要はない。ともかく浅くても良いので、広くすくい取って知らせることが肝要となる。次には個々の資料に公開についてのステータスを付与することである。これは資料保存上の配慮と個人情報保護の観点から行われるべきである。逆にいうとそれ以外の理由での公開制限は行われるべきではない。この2点については今までも十分な議論が行われている⁸⁾。これらのルールは体系的に取り入れられ、運用されるべきであり、そこにまた、ミュージアムやアーカイブズとの連携が活かされるべきである。

大学図書館が、大学の文化資源の出口機能を担っていく、ということは、すなわち大学の顔としての立場を得る、ということになる。大学がその本質において情報の束であるとすれば、扱う情報の範囲を、大学内に存在するあらゆる文化資源へと広げることによって、大学図書館は大学にとって欠かせぬ存在として再び定位されるのである。

注

- 1) 本稿で使用する「文化資源」や「MALUI連携」については、以下の論考を参照のこと。福島幸宏 2011「地域拠点の形成と意義—デジタル文化資源の「資源」はどう調達されるのか?」『デジタル文化資源の活用』(勉誠出版)、福島幸宏 2012「MALUI連携という提案」『情報の科学と技術』62-9。なお、本稿は2011年1月29日に開催された日本図書館研究会

大学図書館研究グループ研究例会で行った報告「公文書管理法が大学図書館にあたる影響」と、2012年8月5日に開催された大学図書館問題研究会第43回全国大会第5分科会で行った報告「大学の文化資源を使い尽くす」をもとにしている。

- 2) 文部科学省報告書「大学図書館の整備について(審議のまとめ)」平成22年12月、10ページ。
3) たとえば、2011年から始まっている「京都・大学ミュージアム連携事業」では展示面での連携はいわれ、実際に2012年10月から「大学は宝箱!—京の大学ミュージアム収蔵品展—」が開催されているが、データベースによる資料公開についての議論は立ち後れている。これは、収蔵資料の全容を示す、というマインドが教員や学芸員に弱く、資料を抱え込む傾向があることが原因であろう。
4) 北海道大学学術成果コレクション「インフルエンザなどの人獣共通感染症を克服する」は、mpg形式のファイルである。
<http://hdl.handle.net/2115/44081> (2012年10月22日確認)。
5) この点を理解できずに図書館員の役割をごく狭義の「図書」の扱いにのみ限定している論調がまま見られる。たとえば、drfメーリングリストの以下の議論など参照。
<http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drfml/msg03103.html> (2012年10月22日確認)。
6) この点、奈良県立図書館がアーカイブ資料の公開について図書のOPACに入れ込んで運用している先行事例がある。
7) DC-NDLについては以下を参照。
<http://www.ndl.go.jp/aboutus/standards/meta.html> (2012年10月22日確認)。
8) その成果として、国立公文書館では個人情報コントロールのための基準を設定している。その概要は以下を参照のこと。
<http://www.cas.go.jp/jp/seisaku/gijiroku/sagyoul/1siryou9.pdf> (2012年10月22日確認)。

(ふくしま ゆきひろ: 京都府立総合資料館)
[NDC9: 017.7 BSH: 大学図書館]

図書館
雑誌
The Library Journal
2012(11) Vol.106 No.11

●編集委員会

〈委員長〉
谷口 豊 (日本体育大学図書館)
〈副委員長〉
大塚敏高 (神奈川県立図書館)
〈委員〉
仲尾正司 (和光大学附属梅根記念図書・情報館)
中村保彦 (文教大学湘南図書館)
長谷川優子 (埼玉県立浦和図書館)
榎山未帆 (国立国会図書館国際子ども図書館)
平井歩実 (明星大学教育学部)
松本哲郎 (市原市立中央図書館)
山内 薫 (墨田区立あずま図書館)

●事務局スタッフ

秦 秀文・川下美佐子

●今月の表紙
「落葉」



*表紙デザイン=高梨麻世©2012

VOL.106 NO.11 CONTENTS

●漆原宏のフォト・ギャラリー ————— 749
窓●研修を受けよう ————— 柴田正美 752
こらも図書館の自由●
図書館のミッション ————— 山家篤夫 755
●NEWS ————— 753
告知板 … 755/新聞切抜帳 … 758
●新館紹介 ————— 760

* * *

[特集]
大学図書館 2012

大学図書館コンソーシアム連合 (JUSTICE) の活動と今後の展開
————— 熊淵智行 761
附属図書館ラーニング・コモンズを利用した大阪大学における学修支援の
取り組み ————— 堀 一成 765
大学の文化資源へのゲートとしての大学図書館 ————— 福島幸宏 768
学習支援の先進的な取り組み例-国際教養大学図書館の場合- 勝又美智雄 770
機関リポジトリを構築して-聖学院大学での取り組み- 菊池美紀 772
図書館は大学にどの程度の効果をもたらしているか- ACRL (米国大学
図書館協会) の新「高等教育機関における図書館基準」 ————— 永田治樹 774

* * *

臨時理事会, 評議員会開催される-文科省実地検査に基づく財政再建計画等
策定 ————— 社団法人日本図書館協会 793

日本図書館協会学校図書館部会第41回夏季研究会●
図書館の自由と学校図書館 報告 ————— 高橋恵美子 785
「図書館の自由」達成に向けて地道な実践を ————— 平林善春 787

法テラスと図書館の新たな試み-被災地における取り組み
————— 日本司法支援センター宮城地方事務所 (法テラス宮城) 788

インターネットと書誌情報 取次編 ————— 伊藤民雄 790

「図書館の自由に関する全国公立図書館調査 2011年」の結果概要
————— JLA 図書館の自由委員会 796

VOL.106 NO.11 CONTENTS

霞が関だより●第109回
平成24年著作権法改正について ————— 文化庁 776
れふあれんす三題噺●連載その百九十五/武庫川女子大学附属図書館の巻
自校教育につながるレファレンスサービス-大学図書館で愛校心を育む
————— 川崎安子 780

ウチの図書館お宝紹介! ●第124回/九州大学附属図書館医学図書館
貴重古医書コレクション-九州大学附属図書館医学図書館所蔵
————— 井ノ上俊哉 782

小規模図書館奮戦記●その189/埼玉東萌短期大学附属図書館
なんでも貸します-小規模ならではの徹底した資料情報提供と地域との交流
————— 片野裕嗣 784

北から南から●
書評 山下道輔著, 柴田隆行編『ハンセン病図書館: 歴史遺産を後世に』
社会評論 2011.10 183p ————— 菊池 佑 800
障害者サービスの普及活動-新宿区立戸山図書館の広報とマニュアル
作成の試み ————— 川口泰輝 801

図書館員の本棚●
ラーニング・コモンズ ————— 石原真理 804
いま求められる図書館員 ————— 中村保彦 805

* * *

●The Library Journal, November 2012

Special feature: University libraries 2012
JUSTICE: Japan Alliance of University Library Consortia for E-Resources
- Activities and future development (Tomoyuki Kumabuchi) 761
Learning commons at Osaka University Library and learning-support activi-
ties (Kazunari Hori) 765
University libraries as a gateway to university's cultural resources
(Yukihiro Fukushima) 768
Pioneering initiative to support learning - Case study of Akita International
University Library (Michio Katsumata) 770
Institutional repository established - Initiative at Seigakuin University
(Miki Kikuchi) 772
Library contributions to institutional effectiveness - New "Standards for
Libraries in Higher Education" of the ACRL (Association of College and
Research Libraries) (Haruki Nagata) 774

●協会通信 ————— 806
常務理事会 806
事務局カレンダー 807
●こくばん ————— 808
●編集手帳 ————— 808

*「資料室」は休載させていただきました。

●図書館雑誌12月号予告 ————— 799

●発行者
社団法人日本図書館協会©2012
〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14
電 話 (03)3523-0811 (代表)
直 通 (03)3523-0816 (編集部)
F A X (03)3523-0841 (代表)
〈日図協ホームページURL〉
http://www.jla.or.jp
〈JLA メールマガジン申込先アドレス〉
mailnaga@jla.or.jp

*本文は中性紙(冷水抽出 pH8.1)を使用